

タイトル	マルクス・ウェーバー再考
著者	犬飼，裕一； INUKAI，Yuichi
引用	北海学園大学経済学会，63(4)： 59-70
発行日	2016-03-31

《論説》

マルクス・ウェーバー再考

犬 飼 裕 一

はじめに

本稿の課題は、マックス・ウェーバーをめぐる長年の研究を離れて、この人物の書いたテキストそのものを論理として読み解いていくことにある。社会科学に限らず古典的な著作というのは、しばしばそれ自体を目的として解釈される。著作のテキストに、仮に矛盾や食い違い、不明な表現があったとしても、容認される。一見不条理に見える内容でも、実は深い思考に基づいていると解される。また、昔に書かれたテキストは、その時代に応じた事情で、単に今日の視点から見て困難に陥っているにすぎないとされる。「解釈」と呼ばれる行為も、しばしばその線で行われている。偉大な著者はすべてを見通しており、常人には不可能な深遠な英知で字面には現れない「真意」を抱いているのだというわけである。

一方で、この種の解釈が古典的な著作の神秘化をもたらし、理解困難なものにしていくのは事実である。なにしろ、普通の読み方では読めないのだから、普通の読者ではお手上げである。すると、以前の名人クラスの読み手が読み込んだ解釈をいろいろ学習する必要が出てくる。しかも、時を経るとだんだん解釈が積み重なっていく。昨今は比較的冷笑的な調子で使われる「ウェーバー学」というのも典型的な例である。学問というのは、根本的に自己目的・自己産出的な営みなので、

もちろんそのことをもって非難する必要はない。

ただし、別の可能性があってもよいだろう。それは、テキストをその論理だけに内在して読んでいくという読み方である。そして、矛盾しているのならば、矛盾していると指摘する。変なところがあれば、変だという。考えてみれば当たり前のことで、すべての人々は普通の本をそういうふうに読んでいる。そんな普通の読み方を、古典について回復することはできないのか。これがここでの筆者の立場なのである。

この意味で、本稿の議論は基本的に学説史的なものではなくて、あくまで理論研究である。言い換えれば、古典が理論としてまだどれだけの力を秘めているのか、いないのかを見極めようとする。いかなる読みにも、不可避に筆者の解釈が介在し、解釈はしばしば過去の「研究史」に重複することもあるかもしれないが、関心のある向きはご指摘を願うばかりである。

1. ブルジョワ・マルクス

「ブルジョワ・マルクス」という言葉がある。マックス・ウェーバーを指して、主にマルクス主義者が使った表現である。ウェーバーがマルクスの議論を受け継ぎながら、自分なりの独自の展開をしたのだという解釈を含んでいる。それは、一方では「ブルジョ

ワ」として、マルクス主義の標榜する「革命」に対抗する姿勢を言い表しているながら、同時に在来のマルクス主義への批判的検討をも可能にする。受け入れながら、同時に拒絶する。賞賛しながら、批判し、非難する。そんな両義的な態度が、「ブルジョワ・マルクス」という言葉に込められていたのだろう。

たとえばフランクフルト学派と呼ばれる人々がマルクスと並んでウェーバーについて盛んに論じたのは、まさにこのような姿勢によってである。さらに、日本の大塚久雄や丸山真男、そして大塚学派といった人々が、いわゆる「マルクス・ウェーバー」という形で表現していたのも、やはりこのような両義的な理解である。簡単にいえば、基本はマルクスで、そこに「ブルジョワ」でありながら、無視できないウェーバーの慧眼を援用するといった立場である。

そんな人々が長年にわたって注目してきたのがウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』である。とりわけ、この長大な論文の末尾に登場する「鉄の檻」をめぐる悲観的な未来予測は、毎度毎度飽きることなく繰り返し引用され、言及されてきた。

「ピューリタンたちは職業人(Berufsmensch)であろうと欲した。しかしわたしたちは職業人でなければならないのである。かつては修道院の小さな房のうちで行われていた禁欲が、現世の職業生活のうちに持ち込まれ、世俗的な倫理を支配するようになった。そしてこの禁欲は、自動的で機械的な生産を可能にする技術的および経済的な条件と結びついて、近代的な経済秩序のあの強力な宇宙を構築するために貢献したのである。このコスモスは今や、直接に経済的な営利活動に携わる人々だけではなく、その機構のうちに生まれてくるすべての個人の生活のスタイルを、圧倒的な威力

によって決定しているのである。そして化石燃料の最後の一塊が燃え尽きるまで、今後も決定しつづけるだろう。バクスター〔Richard Baxter, 1615-91 はイギリスのピューリタン教会指導者〕は、外的な事物についての配慮は、「いつでも脱ぐことのできる薄い外套」のように、聖徒の肩に掛けられているべきだと考えていた。しかし運命はこの外套を、鋼鉄のように堅い〈檻〉にしてしまった(Aber aus dem Mantel ließ das Verhängnis ein stahlhartes Gehäuse werden.)。禁欲が世界を作り直し、世俗の内部で働きかけようとしているうちに、これまでの歴史においてかつて例がないほどに、世俗の外的な事物が人間にますます強い力を及ぼすようになり、ついに人間はこれから逃れることができなくなったのである。」(マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』, 中山元訳, 日経 BP 社, 2010 年, 492-493 頁)

昔の禁欲的プロテスタントは聖なる目的のために世俗的な問題を利用しようとしたが、資本主義の発展によって関係が逆転してしまい、「薄い外套」は「鉄の檻」になってしまった。宗教が目的で、職業生活は手段だったのが、職業生活(ビジネス)が目的で宗教がそのための手段となる。マックス・ウェーバーが続編の『プロテスタンティズムの教派と資本主義の精神』で書いているように、アメリカの産業人にとって教会に通うことは、信仰が目的であるというよりも、「信用できる人間」であると見なされるための手段なのである。

毎週教会に通って「信仰を持っている人間」としてふるまうことは、そこに同じように通ってきている同業関係者と定期的に会うことであり、定期的、継続的に一定の時間を共有することによって、日々信頼を作りだし

ている。日頃の業務では冷酷な選択を行う人物も、本当は仲間を思いやることのできる善人なのだというわけである。

さらにいえば、教会そのものが特定の社会層の性質を強く持つようになると、毎週特定の教会に集まる有力者、つまり経営者や幹部、事業主、政治家や上層公務員といった人々は常に異業種交流を行っているわけで、そこで「信用できる人間」であるということは、様々な形の利益を得ることでもある。

そんな産業人や経営者や政治家の態度が、宗教的な純粋さを求める人々にとって、「不純」であり、打算的であると感じられることは自然である。この種の人々にとっては、本来目的であるべき宗教信仰が、まさに手段として利用されているからである。

本来「手段」であったことが「目的」となってしまう、「目的」であったはずのことが「手段」になってしまう。それは、まさにマルクスの「疎外論 (Entfremdung)」を連想させる。人間は自分たちの幸せや豊かさのために「資本主義」を作りだしたが、その結果として「資本主義」が人間を隷属化し、幸せでも豊かでもない状態に陥らせている、というのがマルクスとマルクス主義者たちの議論である。それはマルクス系の議論にあって、一種独特な魅力となっている。

いうならば逆説の魅力である。人はおのれの欲望のために利己的に振る舞うが、それが究極的におのれの利益になるとは限らない。利益を独占しようとする行為が、最終的には破滅して他者の利益になることもありうる。その究極が、「資本主義」が究極まで進むことで自壊し、「プロレタリア革命」を経て「共産主義」に至るというマルクスの予言である。「資本家」はおのれの欲望と利益を実現することで「労働者」を解放するのだというわけである。

逆説は、結論に予想外の意外な帰結をもってくることによって、読者を驚かせ、刺激し、

納得させようとする。それは論理の展開というよりも、修辞 (レトリック) の技法である。理由は簡単で、自明の結論から恣意的な「原因」にさかのぼっているからであり、また、原因からいつ実現するのか不明の結果に結びつけているからである。論点先取、遡及論理、そしてたんなる奇抜な予言であり、学問的な論証ではない。

そして、逆説の魅力は、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』にも当てはまる。純粋に宗教的な目的を追求した禁欲的プロテスタント教徒が、結果として欲望の体系としての (近代) 資本主義を生み出し、信仰生活によって自由になろうとした長年の努力の結果、ますます従属させられる。それは、「資本主義」をますます栄えさせようとして「プロレタリア革命」や「共産主義」を近づけてしまう「資本家」について語るマルクスと共通の修辞 (レトリック) の技法である。

修辞 (レトリック) を通じて、「マルクス・ウェーバー」は堅く結びつけられているといえる。ウェーバーの場合も、誰もが知っている「(近代) 資本主義」というのが前提としてあり、それに対して恣意的な「原因」である「禁欲的プロテスタンティズム」が対置され、遡及的に因果関係を説明する。

論理的に考えるならば、たとえば、交通事故という「結果」に対して、出発前の夫婦喧嘩を「原因」として対置するのと構造が似ている。普段なら冷静なドライバーが、家を出る直前に夫婦喧嘩をしたため、気持ちが動転し、冷静さを失っていた結果として事故を起こしてしまった、と主張する場合、説明のレトリックとしては説得力がある。しかし、これは因果関係ではない。世の中には、車を運転する前に夫婦喧嘩をする人が無数にいるが、夫婦喧嘩をした人々がすべて交通事故を起こすわけではないからである。

他方、世の中に交通事故を起こしたくて夫

婦喧嘩をする人はいない。それが、予想外の結果として交通事故につながったとするならば、逆説となる。交通安全啓発ドラマの筋書きとしては意味深いのかもしれないが、夫婦喧嘩を抑止することが交通事故の防止になると大真面目に主張することはできない。交通事故の原因として「夫婦喧嘩」を挙げるのが恣意的であるのは、それを「睡眠不足」や「前日の深酒」、「時に起こるめまい」、あるいは「運転しながらの携帯端末の操作」に置き換えることもできるからである。現に、これらすべてが同じ人物に当てはまるなどということはいくらでもある。しかも、交通事故には自損事故を除けば、相手がある。もちろん、相手の不注意運転を引き起こすこれまたさまざまな「原因」も考慮に入れなければならない。

話を戻すと、「交通事故」というのもすでに十分に複雑な要因から成り立つ社会現象であるが、「資本主義」の複雑さは交通事故の比ではない。マルクスもウェーバーもいろいろな「原因」を探ろうとするが、「資本の蓄積」や「独占」、「禁欲的プロテスタンティズム」というのは、要するに上記の「夫婦喧嘩」のような説明でしかない。より多くの人々を服従させようと金を貯める人物の意図が、そのまま「資本主義」の原因になるわけではないし、禁欲生活に精進する人々が、予想外の結果として「資本主義」を生み出したわけでもない。もちろん自分の会社を大きくしようと努力する経営者が、予想外の結果として「共産主義社会」を生み出すという保証もない。もちろん、禁欲的プロテスタントが、予想外の結果として「鉄の檻」を生み出したというのも、単なる説明である。

2. 鉄の檻という運命？

「鉄の檻」はウェーバーの議論を代表するものとして理解され、マルクスとマルクス主

義者が「革命」による解放を目指すのに対し、「ブルジョワ」であるウェーバーは、「解放」ではなく、「運命」として隷従状態を甘受することを主張したと解釈されてきた。それは、独特の悲観主義（ペシミズム）として、あるいは悲劇に耐える強さや、勇気、決意、あるいは「男らしさ」を意味するものともされてきた。

その種の悲観と強い心（タフ・マインド）への志向は、マックス・ウェーバーという思想家に独特の性格として広く知られ、その点でも共感を呼んできたといえる。無責任で正体不明な救済思想やユートピア願望に流れるのではなく、過酷で厳しい現実をそのまま受け入れる強さこそが、責任であり成熟した人間の条件なのだという考えにも結びついていく。このことは、ウェーバー自身が、「支配」や「権力」「闘争」といったテーマについて多くの著述を残していることと関係しているし、おそらく当人自身の考え方もこれに近いのだろう。

ただし、視点を変えて再考すると、ウェーバーの「鉄の檻」というのは、現状認識においてマルクスやマルクス主義者たちと大して変わらないともいえる。つまり、巨大で宿命的な力をもって人々に迫ってくる「資本主義」というのがあり、多くの人々はそれに対して無力である。マルクスの場合は、いわゆる「窮乏化法則」と呼ばれるもので、資本の独占が進んでいくと大半の人々は「プロレタリア」になるのだという考えである。そして、極限まで窮乏化が進むと、やがて資本主義が自壊して貧富の格差のない共産主義社会が生まれるというのが周知のマルクス主義の主張である。つまり、最後の部分の資本主義の自壊というのが否定され、いくら不快で過酷であるにせよ、「鉄の檻」が永続するに違いないと考えるのがウェーバーである。

「資本主義」を永続するものと考え、また見方によっては、永続させなければならない

と意図している——企んでいる——と見なすならば、先の「ブルジョワ・マルクス」という理解には説得力がある。マルクス主義者は資本主義の自壊や国家の消滅を望むが、「ブルジョワ」であるウェーバーは、マルクスに学びながらも、資本主義や国家の永続を願っているのだというわけである。

そして、この種の理解も間違っているとはいえない。現に恵まれた社会階層に生まれ育ったウェーバーは、「階級」の既得権を守るために、多くの人々に「鉄の檻」に耐えろと要求したのだというわけである。このように解釈したとしても、当人も含めて否定することはできないだろう。

ただし、問題はこの種の「マルクス・ウェーバー」的な現状判断や未来予測が、本当に妥当なのかということにある。それは、いうならばマルクスと「ブルジョワ」の共存関係について問い直すことでもある。それは、この種の共存関係が成り立っている条件を問い直すことであり、またなぜ成り立たされているのかを問うことでもある。

ウェーバーのいう「鉄の檻」として最大の問題は、やはり「資本主義」あるいは、「近代資本主義」を一体の塊、それ自体として存在する実体として考えてしまっているという点である。もちろん、この点でマルクスと同じである。先の引用にもあったように、「近代的な経済秩序を作りだしている強大な宇宙（コスモス）」が、人々を捕らえて逃げられなくしているといった説明は、何らかの実体的な概念を前提としなければ不可能である。

ただし、一旦、その種の学説史的な知識や素養を度外視して考えると、一体の巨大な実体としての「資本主義」などというものが実在すると考えることは不自然である。そんなものは誰も目にしたことがないし、特定の場所に実在するわけでもない。

ただし、議論をもう少し緻密に、認識論的

な次元に移すと、さらに別の問題が待っている。つまり、ウェーバー自身が依拠している新カント派の認識論を織り込んで考えるわけである。すなわち、「資本主義」というのはマルクスのような実体概念ではなくて、あくまでも認識のためのカテゴリーであり、イデアアルティプス（Idealtypus 理想型、理念型）であると考えてみるわけである。つまり、特定の観点から見た枠組みとして設定された「資本主義」という概念を通して、複雑で見渡しがたい現実社会を理解可能な形に加工しているということになる。その場合、「資本主義」というのは、あくまでも仮説的な約束であって、他にも構成可能な選択肢の一つにすぎない。それはあえて一面的な概念に議論を絞ることによって、より緻密な認識を可能にする一方で、他の可能性を否定することはありえない。仮説はどこまでいっても仮説であり、構成された概念はどこまでいっても構成された概念でしかない。他の仮説も、別様に構成された概念も常に排除できないからである。

すると、さらに一層困難な問題がウェーバーを待ち構えていることになる。このことは先の引用を再度読み直すだけで十分だろう。単なる仮説が、単なる概念が、なんで「運命」として人々を拘束し、「鉄の檻」として閉じ込めるのか。

かなり皮肉な解釈を加えるならば、これ自体が一つの逆説、あるいは笑えない冗談ともいえる。つまり、人々に向かって「あなた方は鉄の檻に閉じ込められている！ 脱出は不可能です！」と言いながら、同時に、「私が今いった『鉄の檻』は実在しません！ あなた方は本来自由です！」と主張するわけである。さらにいえば、ウェーバーは「イデアアルティプス」として「資本主義」を構想したのだが、予想外の展開によってそれを「鉄の檻」として運命視するようになってしまった。しかし、はたしてそんな逆説が説得力を持つ

だろうか。

この問題は、学説史的な議論にもっていくとさらに深刻になる。マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、1904年と1905年にウェーバー自身とヴェルナー・ゾンバルト、エドガー・ヤッフエが編集する『社会科学および社会政策アルヒーフ』誌の第19巻と第20巻に発表されているが、第19巻には雑誌の綱領論文として、『社会科学および社会政策における認識の「客観性」』（以下『「客観性」論文』と略）が発表されている。

これは方法論をめぐるマックス・ウェーバーの代表作とも呼ぶべきものであり、両論文が同じ雑誌の同じ巻に発表されていることは、学説史的に重要である。つまり、個別研究として書かれた『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、綱領論文である『「客観性」論文』の立場を守っていなければならないはずだからである。現に、有名な「イデアルティプス」をめぐるウェーバーの議論もこの『「客観性」論文』に登場する。これはいうならば新カント派の社会科学方法論を集大成した著作である。

しかし、困ったことにウェーバーの用いる「資本主義」や、当人のいう「鉄の檻」は、おおよそ「イデアルティプス」と呼べる代物ではない。つまり、自分が命令する方法論上の決まりを、当人が守っていない。簡単にいえば、ウェーバーは自己言及できていない。

当人の意識をおおよそ想像するならば、肝心の「禁欲的プロテスタンティズム」については「イデアルティプス」として概念構成することも意図していたのだが、なぜか「資本主義」は自明の存在、実体として放置した。そして、運命的な力としての資本主義に関連するいろいろな要素の一つとして「禁欲的プロテスタンティズム」については詳細に考察する。しかし、関連の要素についていくら細かく考えても、さらに一層重要な「資本主

義」については、マルクスの考えをほとんどそのまま受け入れてしまっている。

ただし、ウェーバーの立場をかなり代弁していえば、この人は「資本主義」をそのまま巨大な実体として捉えているわけではない。概念上の加工が加えられて、「資本主義」は、あくまでも人々の思考上の問題として、「資本主義の精神」へと加工されている。それは「精神」であって、実体的な「経済」そのものでもなければ「社会」や「体制」それ自体でもない。現にウェーバーは「資本主義の精神」について次のように書いている。

「また、わたしたちがここで検討しようとしている歴史的な現象を分析するには、これから説明しようとする視点だけが唯一のものであるわけではない。どの歴史的な現象にも言えることだが、もしも異なる視点から考察するならば、もっと異なる特徴が「本質的なもの」とみなされるだろう。だからわたしたちの視点からみてもっとも本質的なものと私たちに思われるものだけによって、資本主義の「精神」を理解できるわけではないし、そうでなければならないこともない。これは「歴史的な概念構成」という作業につきものの特徴であって、方法論の目的からは、抽象的な類概念に合わせて現実を切りとるようなことをしてはならない。むしろ具体的で発生的な関連において、個体的な個別の色彩のうちに、全体の構造を構築していく必要があるのだ。」

(44-45頁)

まさに新カント派の概念構成論の線上の議論である。他にもある可能性を決して排除してはならないのである。逆にいえば、他の可能性を排除して独占的な地位を主張するならば、その概念は実体化される。それでは、ヘーゲル主義者やマルクス主義者の掲げる実体概念と大して変らない概念を掲げる議論になってしまうのである。

では、ウェーバーのいう「資本主義の精神」というのは、本当に他の可能性を確保しているのか。ヘーゲルのいう「国家」やマルクスの「資本主義」のような実体概念ではないのか。そもそも、仮説としての性格を保っているのか。おそらくこの点こそが、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の発表以来、多くの批判者たちが突いてきた問題点であろう。

そして、マルクス以来の「資本主義」を、ウェーバーが「資本主義の精神」と言い換えることで、それが単なる仮説、認識上の約束事になっているのかといえ、はなはだ疑問である。鍵は、やはり「鉄の檻」であり、そもそも作業仮説を設けて認識を行う論者が、避けられない運命を厳粛に言い渡すというのは自己矛盾である。

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、すでに論文全体として、異様な形で議論が展開している。論文の冒頭近くに、フランクリン（1705-90）からの長文の引用が登場して、それを「資本主義の精神」の最も典型的な見本であると説明する。そして、それが禁欲的プロテスタンティズムの教理の帰結なのだとし、いろいろな神学論が展開した後、ピューリタンたちが意図せざる結果として近代資本主義の「鉄の檻」を作ってしまったのだという、すでにここで指摘してきた逆説に向かう。

何より目を引くのは、最初のフランクリンと「鉄の檻」の落差である。世界中で読みつがれてきた名著『フランクリン自伝』を一読すればすぐに分かることだが、フランクリンにその種の悲壮な運命観はない。「時は金なり」、一日にある金額を稼ぐことができる人間が、一日を怠惰に過ごしたなら、本来稼げたはずの金を捨てたことになる。金は金を生み、信用は信用の根拠となって、毎日の積み重ねが長期的には圧倒的な差になる。そして、資金を貯めて事業を興し、雇用を作りだし、

利潤を投資し、さらに儲けて、自分自身と従業員を幸せにする。そして、ついには建国の父として「アメリカ合衆国」まで作ってしまった。

今日でも世界中で刊行されている「ビジネス書」の元祖がまさにフランクリンである。そんなフランクリンが、ウェーバーのいうような「鉄の檻」に閉じ込められているのかといえ、そのようには見えない。フランクリンは18世紀の人物だが、20世紀初頭のウェーバーの時代にも、そして現代でも、フランクリンのような人物は世界中にいるし、やはり彼らは鉄の檻の囚人ではない。理由は簡単で、フランクリンは創業経営者であり、自分で価値を作り出す人物だからである。

そして、フランクリンのような人物は、自分の運命は自分で作り出したのだと固く信じている。つまり、冒頭に掲げた「フランクリン」が決して行き着かない結論に、ウェーバーは向かってしまうのである。逆にいえば、禁欲的プロテスタンティズムが生まれた頃の人々が、すべて自由に暮らしていたのか、自分の運命を自分で切り開いていたのかといえ、そんなことはないだろう。以前の社会が自由で、資本主義のせいでそれが不自由になったという一種の「歴史主義」は、かなり歴史の実情から遊離している。この意味でも、ウェーバーはマルクス流の思考様式からたいして離れていないのである。

この意味でも、「マルクス・ウェーバー」、「ブルジョワ・マルクス」の名前は裏切っていないといえる。

3. 資本主義、概念という鉄の檻

他方で、「鉄の檻」のような悲観的な時代診断や予言が、むしろその種の「運命」を自ら招いていると考えることもできる。自分は不自由だ、悲惨だ、現代社会は人間を奴隷化するといった主張は、必要以上に社会生活を

困難であると思わせ、個人が自分の運命を切り開く努力を弱体化させる。また、何らかの困難に陥っている人々が、あらゆる困難の原因を社会のせいにする原因ともなる。

このことは、悲劇に耐える強さを強調するウェーバーのような人物についてもあてはまる。たとえば、本来の主人公であるフランクリンと比較してみればよい。フランクリンはかなりの強さをもった人物であるが、社会の行く末を悲観してはいないし、多くの人々を幸せにすることができた自分の人生を大いに誇っている。では、フランクリンの時代から二百年以上を経て、今日の人々はみな隷属状態に置かれているのかといえば、そうでもないだろう。今でもフランクリンのような人物はたくさん存在し、現に書店のビジネス書の棚には、顔写真入りでその種の人物の評伝や自伝が山積みになっている。

これは興味深い現象で、これらの立志伝中の人物たちは、少なくとも事業を立ち上げ苦難を乗り越えて大きな成果を上げるくらいなのだから、思想家ウェーバーに比してもその強さで劣らないだろう。倒産の瀬戸際を生き延びて劇的な回復を果たした経営者などは、優良企業をそのまま継承して安定経営している同族社長などよりも、はるかにビジネス書で人気を博する。数千、数万人の社員の生活を救った人物が置かれた状況は、一介の大学人のそれに劣ることはないだろう。それはあらゆる意味での「強さ」を実証した人物である。またそうした強さがあるからこそ、世界中の読者が争ってその種の本を読みたがるわけである。なぜウェーバーは悲観的で、フランクリンのような人々はそうではないのか。

おそらくこの問いは、ウェーバー（やフランクリン）だけにとどまらず、社会科学という知のあり方そのものの性質を問うことにつながっていくだろう。言い換えれば、ウェーバーは楽観的なビジネス書の元祖と苦闘して、悲観的な結論に向かったが、それはなぜなの

かという問題は、依然として百年後の今日でもそのまま問われうるからである。

問題は、ウェーバーの有名な論文の表題にも登場する「資本主義」（あるいは「資本主義の精神」）という概念にある。これはまさに魔法の概念で、同時に概念の魔法でもある。そして、ウェーバー自身も魔法の概念を使いながら、同時に魔法にかかっている。

簡単にいえば、マルクス以来の議論は、「資本主義」という概念を入り口にして議論を組み立てている。ただし、肝心の「資本主義」というのが何なのかというと神秘の霧に包まれている。ただし、神秘の存在をいろいろ観察していると、どうもそれは、それ自体で存在できる実体であり、しかも巨大ですべての人々の頭の上に覆い被さっているかのようである。

さらにいうと、ウェーバーやマルクスが用いている「資本主義」という概念は、時間の経過によって社会が一定の方向に変っていくという考えを含んでいる。現に、ウェーバーが「しかし運命はこの外套を、鋼鉄のように堅い〈檻〉にしてしまった」と書くとき、資本主義的な経済秩序や社会秩序が、別の状態から「鉄の檻」に変化していくのだという理解を含んでいる。他にはおそらく考えられない解釈を追加すれば、ウェーバーは禁欲的プロテスタンティズムの創始者たちや初期の指導者たちが比較的自由な状態にあり、多くの選択しに恵まれていたのに対し、その後の人々は不自由になり、そこから脱出することが不可能になってしまったと考えている。つまり、以前の人々は自由であり、現在と未来の人々は不自由で、未来の人々はもっと不自由になるということである。

もしもこの解釈が正しいのならば、ウェーバーは時間の経過、つまり歴史の流れに特定の方向性があり、複雑な人間社会といえども、全体として同じような方向に向かうのだと考

えている。それは、過去から現在への「歴史」であると同時に、同じような方向の変化が未来にもつづくという意味で「予言」でもある。このように考えるならば、ウェーバーの「鉄の檻」というのは、マルクスのいう「共産主義社会」のネガ（陰画）と見なすこともできる。

「マルクス・ウェーバー」に共通して含まれているのは、やはり逆説である。多くの場合、マルクス主義者たちはそれを「弁証法」と呼ぶのだろう。ただし、両者の違いは、過去から現在や未来への逆説と、現在から未来への逆説の違いである。ウェーバーは禁欲的プロテスタンティズムの創始者たちの意図が予想外の結果——逆説——として（近代）資本主義を生み出したと考えた。これに対して、マルクスは、現代（マルクスの当時）の強欲な資本家がおのれの欲望を究極的に実現することによって予想外の結果——逆説——として「共産主義社会」を実現すると考えた。

両方とも逆説を介して、いうならば「歴史法則」のようなものを主張している。人間の歴史には特定の方向性がある。そして、人々はその方向性——運命——に逆らうことはできないと考える。しかし、冷静に考えてみると、その種の歴史法則に根拠があるのかといえ、根拠を見つけることは難しい。とりわけ未来の予測に関しては、今までそうだったから今後もそうであるにちがいないと主張しているにすぎない。現に、「マルクスの予言」と呼ばれるものはほとんどすべて外れており、今後それが実現する可能性もほとんどない。

他方で、過去から現在に向かうウェーバーの逆説は、そもそも『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に、主人公として登場するフランクリンの存在によって裏切られている。肝心のフランクリンとその後継者たちは、現に「鉄の檻」の住人ではないからである。家主のウェーバーは住居として「鉄の檻」を指定したのだが、店子のフランクリ

ンは、そこに住まないで住所不定のままである。彼らは居場所がなくて、むしろ困っているのではないか。

「マルクス・ウェーバー」は、両者とも「資本主義」を魔法の概念として想定しており、同時にみずからも魔法にかかっている。ただし、魔法を解くのは難しくない。それはただ一言の呪文で雲散霧消する。すなわち、「資本主義と呼ばれる社会に住む人々は一種類ではない！」という呪文である。マルクスの「資本主義」に暮らす人々にはいろいろな種類があり、従属的な地位にある人々もいれば、支配的な地位を享受する人々もいる。両者の間の争いをマルクスは「階級闘争」と呼んだが、闘争が闘争である以上は、どちらが勝つのかは本来不明だろう（どちらかが勝つとあらかじめ分かっているのならば、それは闘争ではなくて、単に勝利予告、あるいは宗教的な救済論である）。もちろん、「資本家（ブルジョワ）」が勝利して、多くの人々が「鉄の檻」に閉じ込められることもありうる。ウェーバーが考える「鉄の檻」は、もしかするとそのような社会なのかもしれない。筆者の想像では、「マルクス・ウェーバー」を掲げたマルクス主義者の多くは、おそらくそのような解釈したのだらうと思われる。

しかし、この種の歴史法則は、結局のところ論者による、単なる遡及論理（誰の目にも明らかな結果に対して恣意的な原因を主張すること）か、あるいは単なる願望でしかない。

私見では、「マルクス・ウェーバー」の急所は、そこに「自力で運命を作り出す人間」を考えることができなかったことにある。ウェーバーがとりわけ興味深いのは、「フランクリン」という、とりわけ不利な実例を、あえて『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の主人公にもってきってしまったことである。では、なぜそんなことをしたのだろうか。

さらに推測（仮説）を加えるならば、マル

クス流の歴史法則に強い影響を受けたマックス・ウェーバー（「ブルジョワ・マルクス」）は、マルクスに対抗するために当時（1904年）の新興国であったアメリカ合衆国の事例を考えようとした。そこで登場したのが「フランクリン」である。ただし、この魅力的な人物、「アメリカンドリーム」の元祖は、「マックス・ウェーバー」の歴史法則を共有できない人物であった。フランクリンは既存の価値を打ち破り、自ら価値を作り出す人物である。当然、行き詰った自分の運命に絶望などするはずもない。

おそらく、フランクリンは「鉄の檻」に閉じ込められて絶望するくらいならば、自分で新しい「檻」を建設して、そこに多くの人々を移そうと考えるだろう。それは自らの運命を自ら招き寄せるか、運命自体を作り出す人間である。彼らは他人志向ではなく、自立的なのである。この種の人々は常に自己責任で生きている。他人任せにするくらいならば、自分で困難に立ち向かおうとし、結果として失敗しても、他人のせいにはしない。ましてや、特定の魔法の存在——「資本主義」や「国家権力」——を想定して、責任をそれに転嫁することは絶対にない。

何よりも大きな違いをもたらすのは、社会を作り出しているのは自分自身であり、責任も自分自身にあるという考えである。「天はみずから助くる者を助く（God helps those who help themselves）」というわけで、ウェーバーが「禁欲的プロテスタンティズム」について論じた詳細な議論は、結局ここに行き着くのではないだろうか。「救い」や「救いの確証」を自ら作り出すことを要求された禁欲的プロテスタントの信者たちは、それを実現する方策として、「自助者フランクリン」に行き着いたのである。

ここまでは、まさにウェーバーの優れた着想であるといえる。現に、メイフラワー号以来、「ピューリタン国家」を標榜してきたア

メリカ合衆国の、建国の父、最大の偉人の一人がフランクリンだからである。ここまでは、ごく自然な目的達成があるだけで、逆説のたぐいの修辞法は必要ない。変な歴史法則などもないのである。現に、実在の人物としてのフランクリンが、今日のアメリカ合衆国のありさまを予言できたかといえ、それはありえないだろう。「建国の父」は、ともかく建国することに必死で、それ以降の展開など想像することもできなかっただろう。

もちろん、そのことをもってフランクリンを非難する必要はない。どんな人間にも、「未来」を、確かなこととして予測することなどできないからである。むしろ、その種の超能力をもっていると自称する人物の方が異常なのである。

結論 マルクス・ウェーバーをこえて

ここではマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を素材として、マルクスの議論との関係——「マルクス・ウェーバー」——を問うてきた。そこで行き着いたのが、歴史には、そして人間社会には特定の法則があるという考えと、それに基づく運命論的思考であった。運命論は、「救済論」や「終末論」あるいは「没落史観」と言い換えることができる。

何よりも印象的なのは、運命論がもっている魅力である。それは、おそらく無力な人間の前に絶対者として立ちのびる存在を想定する思考習慣に基づいているのだろう。多くの人々はそれをユダヤ・キリスト教の神であるとみなすにちがいない。絶対者の思想は、人間の無力さを強調し、人々に謙虚を求める思想でもあった。

何よりも興味深いのは、マルクスが大きな影響を受けた、いわゆる「唯物論」で有名なルートヴィヒ・フォイエルバッハ（1804-72）が、「神は人間が作った」と主張したことで

あろう。古くからヨーロッパ人は、キリスト教徒は、人間の努力ではいかんともしがたい運命を、「神」と呼んできた。神が神であるのは、それが人間の意志から切り離されているからである。しかし、それを「人間が作った」を主張するならば、人間の運命もまた人間が自分の意志で作っているということになってしまう。そして、運命を人間が自ら作ることができるのならば、それは普通の運命論とは別物である。ここには普通の運命論がもっている魅力はなく、むしろ自分の運命を自己責任で切り開く人間が登場してこざるをえない。こうして議論は「フランクリン」に回帰する。

フランクリンのような人間は「運命」を自ら作りだしていくのだが、すべての人々がそうであるわけではない。当たり前のことをいえば、フランクリンは自分の会社で働く人々を幸せにしたことを誇るが、すべての従業員がそう考えていたわけではないだろう。同じ組織でも、経営者の視点と各層の従業員の視点はそれぞれ異なっている。自ら切り開いていく人々と、信頼できる経営者に従うのが幸せな人々は違ふし、また賃金だけが目的で好きでない仕事についている人物もいるだろう。同じ時間を働いても、まったく疲れを感じない人もいれば、その逆の人もいる。ようするに人さまざまである。

そんな当たり前すぎることに鋭く対立するのが、「マルクス・ウェーバー」の運命論である。フランクリンも従業員といっしょくたに同じ運命を背負わされており、十把一絡げに「鉄の檻」に入れられてしまう。確かに「会社は運命共同体」といえば、これまたビジネス書的な言説につながっていくが、経営者の運命と一介の従業員のそれは同じではない。もちろん、底辺の見習い職工からのし上がったフランクリンと、その種の野心を持たない人々も違う。そんなことは、その種の本の読者に改めて説明するまでもないだろう。

おおよそ現実感からかけ離れた「鉄の檻」は、「フランクリン」を介して別の側面を見せてくれる。それは、マックス・ウェーバーの論理をウェーバー自身に当てはめて考える自己言及の過程でもある。つまり、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の主人公である他ならぬフランクリン自身が、「鉄の檻」を打ち破ってしまう。ウェーバーの弟子でもあったヨーゼフ・シュンペーター(1882-1950)がいった起業家の「創造的破壊」は、当然既存の「鉄の檻」も破壊していくからである。

それは長年マックス・ウェーバーを読んできた人間としては、ひどく残念な結論である。この人は、専門分化して社会の歯車のようになってしまわざるをえない人々の運命で、「フランクリン」までも監禁しようとするのだが、そんなことは不可能である。このことは、ウェーバーの有名な講演『職業としての学問』について考えると、さらに意味深くなってくる。ウェーバーはそこで、狭い自分の専門分野に精進することだけが「職業としての学問」にとって重要なのだと主張する。それは、簡単にいえば、命じられて同じ仕事を延々やり続けるサラリーマンの人生観であって、「フランクリン」のそれではない。簡単に言えば、ウェーバー自身が自らそういう人生を「運命」と呼んでいるにすぎない。

こうしてさらに重要な問題に向かうことができる。それは、命じられ、与えられた既存の秩序を「運命」として実体化して考える思考様式と、それを改良し、創造的に破壊し、再度自ら作りだしていく人々の間の、おそらく永遠の相違である。多くの人々は、実体化した社会や制度、組織を信じて生きているが、一部の人々は自分で作り出し、改変しようとする。ごく醒めた言い方をするならば、人間社会には両方の人材が必要なのである。

他方で、ウェーバーの「結論」は、当人自身の自己矛盾によってひどく印象的であると

もいえる。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に出発した宗教社会学研究は、古代ユダヤ教や儒教、道教、ヒンズー教といった「世界宗教」に向かい、当人の死によって実現しなかったが、イスラム教などにも研究の領域を広げつつあった。「自分の専門分野に仕えよ！」と命令しながら、自分では二次文献を自在に駆使した広大な比較研究を行っていく。まるで多業種にまたがる企業複合体をつくった経営者が、各所の社員に「専門家になれ！」と命令しているかのようなものである。自分はフランクリンのように自由な職業生活を謳歌しながら、社員は「鉄の檻」に閉じ込める。

同じことは、ウェーバーの名前を有名にした「カリスマ」という概念についても当てはまる。そもそも、各所で引用され、詳しく論じられてきたウェーバーの「カリスマ」は、社会を変革する革命的な力をもった人物の「イデオロタイプ」であった。ウェーバー自身それらを論じる時にはひどく思い入れを抱いているようだが、古今東西、世界中に存在する「カリスマ」は、はたして「鉄の檻」の囚人なのだろうか。ここで何よりも思い浮かぶのが、フランクリン自身もかなりカリス

マ的な人物だったことだろう。起業家として成功し、事業拡大し、科学者としても一流で、しかも政治家として合衆国の建国で主役を張る。同国では独立戦争は「独立革命 American Revolution」と呼ばれている。すると、フランクリンは代表的な「革命家」ということになる。ついでにいえば、「フランクリン」は、アメリカで長年百ドル札の「顔」として、今でも別様の「カリスマ」を発揮しつづけている。

マックス・ウェーバーに見られるこの種の食い違いや矛盾は、ある種の読者にとっては魅力なのかもしれない。現に、「矛盾の思想家」といえば、なにやら意味深長な印象である。しかし、私見ではその種の「古典の魅力」に魅せられることよりも、矛盾が矛盾であると明確にすることのほうが重要なのである。

それは逆説や弁証法といった修辞法（レトリック）を、まさに単なる修辞法として識別する知的な営みの入り口ともなりうる。それはまた、同時に、真剣に思考した偉大な精神が、おのれの限界をもってその到達点を示してくれた、貴重な記録だからでもある。

(2015年10月8日)